

氏名	梶田 聡一郎
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博 甲第 6597 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	CT evaluation of patent artery after percutaneous cryoablation of renal cell carcinoma (腎細胞癌に対する経皮的凍結療法後の開存動脈の CT 評価)
論文審査委員	教授 和田 淳 教授 平沢 晃 教授 田端雅弘

学位論文内容の要旨

この後方視的研究は、腎細胞癌に対する経皮的凍結療法後に見られる開存動脈と、凍結療法 1 ヶ月後の開存動脈と早期の腫瘍再発との関連性を明らかにすることを目的とした。

186 個の腎細胞癌に対し凍結療法を施行された 159 人の患者を対象とした。凍結療法後 1 週間以内、1・3・6 ヶ月後に、スライス厚が 2mm 以下の造影 CT を撮影した。腎凍結療法後の腎実質凍結域における開存動脈の経過を主要評価項目とした。

CT では、1 週間以内に 166 例、1 ヶ月後に 54 例、3 ヶ月後に 8 例、6 ヶ月後に 2 例の腎細胞癌で、腎実質凍結域に開存動脈を認めた。凍結療法後 1 ヶ月の時点での開存動脈の存在は、同時点での腫瘍造影効果と有意に関連していた ($P=0.015$)。凍結療法後 1 ヶ月の開存動脈と治療効果には関連がなかった ($P=0.693$)。

腎細胞癌の経皮的凍結療法後の造影 CT では、腎実質凍結域内の開存動脈がよく観察される。これらは徐々に消失し、特別な治療を必要としない。

論文審査結果の要旨

腎細胞癌に対する経皮的凍結療法後 1 ヶ月には腎実質凍結領域に開存動脈が観察される。しかしこの開存動脈と早期の腫瘍再発との関連は明らかではない。

本研究では、腎細胞癌凍結療法後 1 週間以内に多くの開存動脈が観察され、その後 6 ヶ月間でほぼ観察されなくなることを明らかにした。凍結療法後 1 ヶ月の開存動脈と同時に観察される腫瘍造影効果とは有意に関連があったが、最終的な再発とは関連がなかった。

委員より凍結療法後 1 ヶ月に観察される腫瘍造影効果について質問があった。本研究者はこの時期に認められる腫瘍造影効果は、その後消失するため再発の所見ではなく、pseudoenhancement と考えられると回答した。

本研究では、腎細胞癌に対する経皮的凍結療法後の造影 CT を、長期にわたりかつ詳細に検討することにより、腎実質凍結域内に観察される開存動脈は腫瘍再発とは関連がないことを明らかにした。腎細胞癌経皮的凍結療法後の造影 CT により再発の有無を確認する上で重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。